

(公財) 中村元東方研究所／東方学院

東方だより

平成30年度後期号(通号第33号)

〒101-0021
東京都千代田区外神田2-17-2
延寿お茶の水ビル4階
TEL: 03-3251-4081
FAX: 03-3251-4082
<http://www.toho.or.jp>
<http://www.toho-gakuin.org>

目次

理事長ご挨拶	1頁
評議員ご紹介	2頁
芳名録／叙勲記事	3頁
講師・研究会員・研究員の声	4～7頁
新刊案内	7・8・9頁
行事報告・今後の行事	8・9頁
事務局通信	10頁



中村先生の世界平和への願い

—理事長ご挨拶にかえて—

前田専學理事長



本紙において、私は、過去数回にわたって中村先生が世界平和への願いを込めて遺された石碑のことを話題にしてきました。しかしまだ他にもあることを先生のご息女三木純子理事から教えられ、三木ご夫妻から画像が提供されました。

一九一三年に有名な詩集『ギーターンジャリ』によって東洋人として始めてノーベル文学賞を受賞したタゴール(一八六一～一九四一)について、中村先生は…

「一九一六(大正五)年の夏には日本女子大学学長・成瀬仁蔵(二八五八～一九一九)の招待によって日本女子大学を訪問している。成瀬仁蔵はタゴールを特に礼遇した。…またタゴールも、軽井沢の土地が気に入った。現在、彼の来訪を記念して、軽井沢の丘の上にはタゴールの彫像が記念碑として建てられ、そこには「人類不戦」と書かれ、基部にはデーヴァナーガリー文字で“animsa”と記されている⁹⁾。タゴールの像は、山々や丘



タゴール胸像



胸像の背後を弧状に包む白壁にある先生の揮毫

を越えて、遠く人類の平和を呼びかけている。」「(『中村元選集(決定版)第32巻』春秋社、一九九七、pp.188～189)

とお書きになっています。そしてこの注⁹⁾として「この記念碑建立は、高良とみ女史のきもいりによるものである。彫像は高田博厚作のものであり、文字はわたくし中村元の書である。」と記されています。高良とみ女史(一八九六～一九九三)は、参議院議員、平和運動家、タゴール协会会长、自伝『非戦(アヒンサー)を生きる』の著者であり、タゴール記念像の除幕式は一九八一年八月二日に軽井沢碓氷峠の見晴台で行われました。

日本人の自然に対する美意識を高く評価し、徹底した平和主義者であったタゴールは、一九二四年の三度目の来日の際に満州事変以後の日本の軍事行動を批判し、一九二九年五回目の訪日に来日することはありませんでした。そして一九三七年に日中戦争、一九四一年には第二次世界大戦、一九四五年八月には敗戦を迎えることになったのです。「人類不戦」と揮毫された先生(一九二六～一九九九)のご心情がひしひしと伝わって参ります。

評議員ご紹介

今なお新しい
中村元博士の御教示

神田明評議員



『中村元著作集決定版』(全 32 巻別巻 8) は著作集全 23 巻がベアスにあつたものの、企画決定と刊行にかなり

の年月を要した。

昭和六三年(一九八八)刊行を開始し、平成一年七月(一九九九)に完結した。

中村元先生のご逝去は一〇月一〇日であるから、お亡くなりになる直前といえよう。完結の最終巻をご自宅にお持ちしたが、病床から起きてこれられ、大変喜ばれ、記念写真を撮ったことを覚えてい

る。ご逝去を悼む方々からは早く完結しなかつたほうがよかつたのではないかとまでいわれた。



中村元著作集決定版 全 32 巻別巻 8

著作集のための巻毎の膨大な資料を拝見したが、順調に進むと思われた。元先生とは御茶ノ水の聖橋で始終お目にかつたが、いつも両手に原稿の風呂敷包みをも持たれ、著作をいつも気にされ、頭が下がる思いであつた。刊行に時間がかかり、スピードアップをお願いすると、先生は「今、春秋社という監獄に繋がれています。分かりました。」と和やかに応えられたのも印象深い。本著作集は多くの読者から高い評価をいただき、小社の代表的書籍、大きな貴重な宝となっている。

中村元先生の後、理事長にご令室の洛子先生が就任され、そのあと前田専學先生が就任されたが、『中村元構造倫理講座(全 3 巻)』を刊行させていただき、好評を博した。

東方研究所で中村元先生から現在まで続いているのは、元先生と小社社長神田龍一と当時小社社員でもあらられた、瓜生津隆真先生企画の「パリー語三蔵」の現代語訳である。



構造倫理学講座全 3 冊



ジャータカ全集全 10 巻

行計画も大幅に遅れた。

まず手始めはブツダの前生物語『ジャータカ全集』(全 10 巻)で、監修、中村元で、東方学院の関係諸先生を中心として翻訳がなされた。前田専學先生もその第三巻を担当されている。

続いて『長部・中部経典(全 7 巻)』、『相应部経典(全 6 巻)』を刊行し、現在『増支部経典(全 8 巻)』の刊行が行われている。これらはすべて中村元監修、前田専學編集で、訳者は東方研究所関係の諸先生を中心としている。

たとえばここで刊行されようとも最終的にはひとつにして欲しいといわた中村元先生の雄大なご意思を守っていききたい。

当初は新たに出版社を起し、大々的に計画を推進しようとする計画もあつたが、諸般の事情から小社刊行に変更になり、刊

かんだ あきら
昭和 11 年東京生まれ。日立製作所情報通信部門に 21 年勤務後、昭和 51 年春秋社入社。仏教、哲学、経済、文学評論、音楽等の専門書の編纂・刊行に携わる。現在、代表取締役会長。鈴木大拙「松岡文庫」理事。「パートーヴェン・クライス」理事。

平成30年度芳名録 (五十音順・敬称略)

本年度も多くの皆様にご支援いただきました。心から御礼を申し上げるとともに、ご芳名を記します。

※平成31年2月10日受領分までを掲載しております。

維持会員

一心寺 石上和敬 小笠原勝治 オリオン産業株式会社 川崎信定 川崎寿子 川崎大師平間寺 来馬明規 公益財団法人克念社 小坂機融 在家仏教こころの研究所 斎藤敬 宗教法人西来寺 史跡足利学校事務所 清水谷善圭 釈悟震 株式会社春秋社 淳心会(日野紹運) 末廣照純 鈴木一馨 浅草寺 高尾山薬王院 高崎宏子 高松孝行 多田孝文 中央学術研究所 千綿道人 津田眞一 角田泰隆 トヨタ自動車株式会社 中田直道 成田山新勝寺 日本ヨーガ禅道院 念法眞教金剛寺(桶屋良祐) 羽矢辰夫 比良佳代子 公益財団法人仏教伝道協会 法恩寺(藤原敏文) 法清寺(奈良修一) 前田專學 前田式子 松久保秀胤 丸井浩 三木純子 水野善文 三友健谷学校法人武蔵野大学 吉田宏智 渡邊信之 渡邊寶陽 渡邊隆生 山崎桂子

賛助会員

我妻綱子 阿部敦子 有馬頼底 粟野芳夫 石井勝彦 一島正真 入江宥道 石上智康 白井ふじ子 宇杉真 遠藤康 大井玄 太田正孝 大谷光真 小笠原隆元 岡田眞水 岡田行弘 荻山貴美子 桂紹隆 菅野博史 北村彰宏 木村清孝 黒川文字 黒田大雲 小林和子 小林正和 小林守 小峰啓誉 小峰立丸 古村けさじ 小山典勇 金剛院仏教文化研究所 公益社団法人在家仏教協会 斎藤明 佐久間留理子 櫻井瑞彦 桜井俊彦 佐藤行教 下田勇人 新本均 末木文美士 須佐知行 鈴木勇介 関戸堯海 千賀正榮 大海修一 高橋審也 高橋尚夫 田上太秀 武田浩学 立花ひろ子 田丸淑子 千葉よし子 鶴谷志磨子 株式会社展勝地 東京書籍株式会社 公益財団法人東洋哲学研究所 一般財団法人徳育経営研究所 徳田勝洋 戸田裕久 鳥山玲 中谷信一 長野市南長野仏教会 中村行明 中村久夫 中村保志孝 西尾秀生 西岡祖秀 西川高史 西宮寛 日本ヨーガ学会 長谷川恵子 畠中光亨 花岡秀哉 花山多賀江 濱川香雅里 濱川量子 引田弘道 一月正人 平井恭子 福留順子 藤井教公 藤田宏達 法雲寺(水谷浩志) 保坂俊司 堀江順司 松原光法 松本知己 的場裕子 水谷俊一 三友量順 宮元啓一 森祖道 矢島浩志 矢島道彦 山口泰司 桂徳院(山本文溪) 由木義文 好井瑞皖

東方学院後援会

大神神社 奥田聖應 加藤公俊 健代和央 古泉圓順 坂本峰徳 総本山四天王寺 学校法人清風学園 瀧藤尊淳 四天王寺大学 塚原昭應 出口隆順 唐招提寺 東大寺 念法眞教 平岡英信 南谷恵敬 宮崎光映 森田俊朗 森田惇朗 山岡武明 吉田明良

ご寄付

神谷忠雄 川崎信定 佐藤恭子 清水谷善圭 株式会社春秋社 鈴木忠一 関泰長 念法眞教 御園生妙子

平林博評議員が 瑞宝重光章を 叙勲されました

平成三〇年秋の叙勲で、当法人評議員の平林博先生が瑞宝重光章を叙勲されました。

元駐インド大使四年八ヵ月(一九九八年一月〜二〇〇二年八月)、日印協会理事長一一年六ヵ月(二〇〇七年六月〜現在)、元駐フランス大使(二〇〇二年九月〜二〇〇六年五月)等の経歴・功績が評価されたものです。

近著『最後の超大国インド』(二〇一七年、日経BP社)



東方学院

講師ご紹介

今西順吉 講師

(東京本校)



いまにし じゅんきち

1935 年東京生まれ。東京大学文学部、同大学院で印度哲学仏教学を学ぶ。北海道大学文学部長、国際仏教学大学院大学学長・理事長、両大学名誉教授。第 8 回中村元東方学術賞受賞。『漱石文学の思想』第 1 部・第 2 部ほか。

「真の自己とは何か」
をめぐって

周知のように漱石は禅に強い関心を持っていました。明治という文明開化を謳歌する時代において、「自分」をどのように把握して時代に対処すべきかに苦慮し続けていたのです。そして「自己本位」の立場に目覚めることによつて研究対象である「文学」に対する漱石独自の見方を確立して、『文学論』を書くとともに、さらに『文学論』の理論にもとづく創作活動へと転じて現在に至る文名を高めました。

漱石が求めたのは合理的整合的な単なる哲学・理論ではなく、現実問題に対処して生きてゆく人間の心(ハート)を充たし安らげるような思想でした。従つてそれにふさわしい表現手段は学術論文ではなくて、文学作品だったのです。漱石作品の構成は思想によつて支えられており、絢爛たる文才がそれを物語に仕上げています。

漱石作品の根本には「自己本位」の思想があることを漱石自身が明言しています。「心」を書いた後で、『文学論』は失敗作であつたと述懐し、さらに『文学論』にもとづく創作活動も失敗であつたと告白しているからです。自身の文学作品の意義までも否定しているのです。しかし誰もこの言葉に注目していないことには驚くほかありません。明治時代、世界的には「我」を自覚し自己主張が盛んとなつた近代において、漱石がただ独りインド哲学・仏教の中心課題である「自己」を問いつけて模索・挫折していた事実が、漱石の盛名の影で、まったく見落とされてきたのです。

服部育郎 講師

(中部校)



はっとり いくろう

1961 年三重県生まれ。駒澤大学大学院人文科学研究科博士過程満期退学。ブネー大学大学院留学。Ph.D.(ブネー大学)。現在、中村元東方研究所専任研究員、愛知学院大学非常勤講師。主な著書に『テラガーター 真の心の安らぎとは何なのか』(NHK 出版)、『インド仏教人物列伝』(大法輪閣)など。

大学時代に原始仏教に興味をもちました。水野弘元先生の『原始仏教』(サーラ叢書、平楽寺書店)を読んでからだつたと覚えています。そこには、これまでの仏教に対するイメージとは違い、とても分かりやすく、論理的で、現代にも適応できる実践的な思想が説かれていました。しかし、研究となると難しい問題も多く、さらに詳しく、中村元先生の原始仏教に関する研究に導かれました。中村先生の業績は、現在、決定版中村元選集第十一〜十八巻(原始仏教Ⅰ〜Ⅲ)という大部な著作でまとめられています。ページにする

と合計五八〇〇頁を超えます。仏教成立当時の教えは、素朴な形で示されている例が少なくなく、のちに仏教語として固まる以前の表現がみられます。そこで、さらに深く探ってみたくありません。どのような過程で仏教語が出来たのか、原語は何かなどと。ちなみに、中村先生は「寂靜」を「やすらぎ」や「静けさ」と、「遊行」を「巡り歩く」と平易に訳し、そののほう原文に近い直訳だろと述べています。また、「原文を見ない平易な訳は、文学的、教育的にはさしつかえないが、学問的には採用できない」とも指摘しています(『学問の開拓』、ハーベスト出版、一七七頁)。

私が担当させていただいている東方学院の講座(「原始仏教の思想」)は、初期の思想の魅力を伝えることが出来れば、また疑問に思っていたことを少しでも明らかにしてもらえれば、という気持ちでおこなっています。研究会の方々の質問や議論も活発で、楽しく講義をさせていただいています。

東方学院
研究会員の声

石山智さん
(東京本校)

そもそもの話し

今年「韓国仏教史」とパーリ語で「ジャータカ註」を受講しているが、四十年ほど科学技術の応用を飯の種にして来た人間が、仏教に興味を持って勉強しようかと思つたのは、中村元訳の「ブツダのことば」(スッタ(パータ)を若い頃に読んだ記憶が鮮明だったから。原稿依頼に応えるまともな話は無理なので、ごく個人的な経験でお茶を濁そうという次第。



カラコルム・ハイウェーから撮った後、インダス川(ギルギット付近)の山肌を横切る一本の線が古い交易路。玄奘三蔵も通った?

技術の開発研究は必ずいくつもの壁にぶつかる。すぐそこに素晴らしい果実が手に入るはずなのに、である。何をやっても、何度やっても、そうなるはずのことができない。様々な仮説で思考実験し、いくつかはお金と労力をかけて試みる。それも全て無駄になる。退却も迂回もできない。一ヶ月、二ヶ月、半年、一年、と時間はどんどん経過する。世の中はそういうものと決まっているけど、最初は励ましてくれたり、関連情報を教えてくれたり、手伝ってくれたりした人たちも、長く成果が出ないと遠ざかって行く。可哀想だから静かに見守ってくれたのだろう。それがまた実に辛い。そんな時にスッタニパータを、(記録によれば)現役の二十一年間に四回、読んだ。特に「犀の角」がいい。不思議と落ち着く。ただそれだけ。そのうち難題はふつと突然分かって解決した。呆気ないくらいに。

張崎正俊さん
(東京本校)

今まで、中論、教行信

証などを受講してきましたが、よくわからないというのが実情です。わからない理由は何なのでしようか。これらの内容を現実、実生活に紐づけて理解することができないためではないかと思われまます。例えば、自性、五蘊、空、縁起、涅槃、往生などなど様々な言葉が溢れ出て、頭のなかは観念的な知識の洪水となつていきます。



茶の間にて

話は変わりますが、岩波文庫の孫子の大家、金谷先生は、虚実篇で主導性の把握の重要性を強調しています。主導性の把握こそが現実性を作り出すと述べています。小学生の頃、少年探偵団ごっこなど楽しく遊んでいました。遊びの中に主体性があつたように思えます。それから実社会に出てからも、それなりに過ごされたのは、運と恩人の導き助けによるものであり、また、主体性も良い方向に寄与したのかもしれない。龍樹、親鸞の教えは、人間として主体性を持つて生きる方法を示しているのではないかと思えます。老年探偵団としては、楽しみながら受講し、じっくりと主体性の把握に取り組んでいきたいと思つていきます。

森原寄指子さん
(関西校)

なぜ、仏教によって悲しみや苦しみから救われたと思えるのか?

先年弟を亡くした折、仏教によってずいぶん救われた思いをしました。あまりに身近な存在で、深く学ばないままであった仏教についてもっと知りたいと考えるようになりました。初學者むけの書籍を読み進める中、学びたい者に広く門戸を開かれている東方学院のことを知り、北川清仁先生の講座「仏教入門」を受講しています。

先生が採択された高崎直道著『仏教入門』は、仏教を専攻する大学生のためのテキストとのことにて、私にとってはレベルの高すぎる内容です。一応はテキストに眼を通し予習します。が、自分ひとりではとても太刀打ちできません。ノートを取りながら先生のお話を聴いているときには、分かつたつもりになれます。後日ノートを再読すると、やっぱり難しい。なかなか理解が進まず、緊張しながらの受講ですが、月2回のご講義は、仕事での嫌なことも忘れて仏教に對峙できる大切なひと時になっています。ちよつと横道にそれたお話(修行中のエピソードなど)もひそかな楽しみです。

一年ではとてもとても入門完了とは思えず、来年も受講したいと申し出、承諾をいただき、次年度も受講できることに感謝いたしております。



娘の戴灯式にて

研究員の声

加藤みち子専任研究員

生きることの基本である「働くこと」。しかし現在、「労働」は商品のように扱われ、人をだましたり傷つけたりすることが平気な社会を助長させている。人間らしく働き、質の高いよい仕事を生み出しながら、地域・社会を再生する、そのように「生きる」働く「ため」にはどうすればよいのだろうか。

江戸時代初頭に活躍した鈴木正三(すずきしようさん)(一五七九〜一六五五)という禅僧がいる。私たちが、日々の生活の中で仏道修行できる、ということを強く主張した人で、「いずれの事業(ことわざ)も皆仏行なり。人々の所作(しよさ)の上において、成仏したまうべし。」(『万民徳用』)と説く。これは、現代風にいえば、あなたが奉公人(勤め人)ならば



鈴木正三坐像 (心月院蔵、筆者撮影) 勤め先の仕事の上で、主婦ならば家事や育児

の場面でというように、各人の生活や仕事のシーンにおいて、仏道修行ができるし、修行を達成(成仏)することができる、ということである。

それでは、修行とは何をするのか。「只今(ただいま)のわが心を用いて、今、用(よう)にたつることなり」つまり、その時その時の「心」をつかって、それをその場の最適の形で働かせること。具体的には「周りを大切にし」、「人とのかかわりの中で自分みがき」をすることであると正三和尚は述べている。

右の言葉は、仏教研究者にとつては特段目新しい教説というわけではない。しかし、現代において仏教を「学ぶ」生きる「働く」一人の人間として、私はまた日々新たに学びつづけている。

かとう みちこ

千葉県出身。学習院大学大学院にて博士(哲学)を取得。日本思想史(禅仏教を中心として)主著『勇猛精進の聖一鈴木正三』(勉誠出版)、『鈴木正三著作集I, II』(中公クラシックス)、『絵から読み解く日本仏教』(山喜房佛書林)

清水晶子専任研究員

ジャイナ教徒を調査して



釈尊の時代以前より存在していた古い歴史を持つジャイナ教の、特

に信徒のコミュニティーについて研究しております。大半の信徒は都市を中心として、全インドに居住していますが、所属する宗派、地域、コミュニティーによってそれぞれの特徴が見られます。私の研究している北部デリーのグループナガルにあるコミュニティーは、白衣派尊像崇拜派に属するパンジャブ出身の出家修行者を中心とするグループと、緊密な関係を保持しているという特色があります。この僧団は十九世紀の中頃から、長い間、尊像を崇拜する伝統が途絶えていたパキスタン・パンジャブにおいて、改革運動に従事し布教に努めた二人の指導者とその弟子達によって形成されています。分離独立後には、修行者達と

共にパキスタンから避難してきたメンバーが中心となつて、首都に信徒の集団を組織し寺院を建立しました。僧団にとつての新天地を開拓し、物質的にも全面的に支援をしています。僧団の影響力は強く、信徒は、支持する僧尼により小冊子に説かれた教えや直接聴く説教を信仰の拠り所としています。パキスタン、パンジャブ出身の白衣派のジャイナ教徒は、古くからデリーに居住している空衣派のジャイナ教徒とは全く異なる伝統、慣習(カースト、通過儀礼等)を見ることができません。特に、祖先崇拜に関して独特のものがありません。今後は、パンジャブに住む信徒に焦点を当てて、ラージャスターンからパンジャブに至る移住の歴史やパンジャブの文化との融合についての研究をしていきたいと思つていま

しみず あきこ

1955年、福岡県生まれ。ロンドン大学にてPhD取得。デリー大学留学中にホームステイしたことを契機として、デリーのジャイナ教徒の宗教生活や出家の修行者集団に関する研究に従事。現在、筑紫女学園大学非常勤講師。

新 刊 案 内

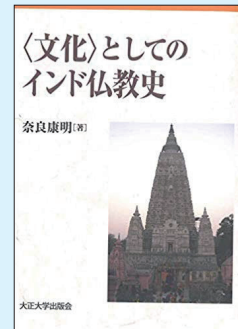


前田専學編

『原始仏典Ⅲ 増支部経典 第五巻』

『パーリ語三蔵』の「経蔵」に収められている原始仏教経典、『長部経典』『中部経典』『相应部経典』につづく『増支部経典 (アングッタラ・ニカーヤ)』の現代語訳。本巻は第六集 (全 12 章)、第七集 (全 8 章) を収録。

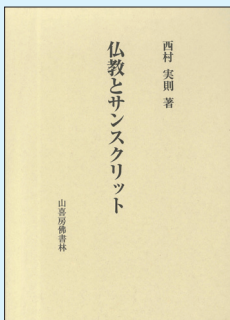
単行本：440 頁
出版社：春秋社 言語：日本語
ISBN-10：4393113551
ISBN-13：978-4393113554
発売日：平成 30 年 10 月 17 日
定価：本体 7,000 円 (税別)



単行本：216 頁
出版社：大正大学出版会
言語：日本語
ISBN-10：4909099271
ISBN-13：978-4909099273
発売日：平成 30 年 11 月 26 日
定価：本体 2,500 円 (税別)

奈良康明著 『〈文化〉としてのインド仏教史』

草創期の仏教は、そして出家した僧侶や教団を支えた信者たちは、強固な身分制が存在したヒンドゥー社会の文化や思想とどう折り合いをつけたのだろうか。仏教を許容し、やがて仏教の中心思想ともなるヒンドゥー社会の文化を「業と輪廻」「縁起」「呪術」と「功德」などをキーワードに解き明かす。



単行本：350 頁
出版社：山喜房佛書林
言語：日本語
ISBN-10：4796302859
ISBN-13：978-4796302852
発売日：平成 29 年 6 月 1 日
定価：本体 8,000 円 (税別)

西村実則著

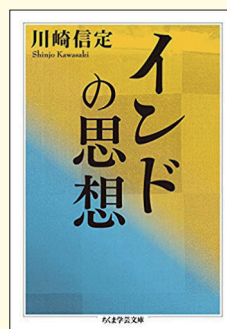
『仏教とサンスクリット』

一地方語から出発した仏教だが、その後バラモン教徒の使用するサンスクリットを採用するようになった。その功罪を論じたのが本書。

川崎信定著

『インドの思想』 (ちくま学芸文庫)

多民族、多言語、多文化。これらを併存させるインドという国を作ってきた考え方とは。ヒンドゥー教や仏教等、主要な思想を案内する恰好の入門書。



文庫本：236 頁
出版社：筑摩書房
言語：日本語
ISBN-10：4480098720
ISBN-13：978-4480098726
発売日：平成 31 年 1 月 10 日
定価：本体 1,000 円 (税別)

行事 イベント 報告

平成30年10月10日(火)開催 中村元東方学術賞・ 中村元東方学術奨励賞 授賞式

於 東京・インド大使館

公益財団法人中村元東方研究所の「顕彰事業」の一環として、「第28回中村元東方学術賞授賞式」が、若手研究者に贈られる「第4回中村元東方学術奨励賞授賞式」と共に東京・九段にあるインド大使館にて行われました。

第28回中村元東方学術賞は、東京大学名誉教授、高橋孝信博士が授賞。高橋博士はタミル文学研究の第一人者で、中村元博士の著書



学術賞 授与



高橋孝信博士

が原点となったタミル文学世界の研究における長年の功績が讃えられました。また、研究のみならず翻訳等で馴染みのなかったタミル文学を日本に広く紹介した事も受賞の理由となりました。

前田専學理事長より「中村元



第28回 中村元 東方学術賞

東方学術賞」が、インド大使閣下より「功績証明書」が授

与され、宮本久義東洋大学客員教授より祝辞が述べられました。

第4回中村元東方学術奨励賞は、名古屋大学大学院附属人類文化遺産テクスト学研究中心研究員の猪瀬千尋博士に贈られました



奨励賞 授与



猪瀬千尋博士

た。博士の著作『中世王権の音楽と儀礼』は、中世の音楽を権力性・身体性・宗教性の3つの点から明らかにし、数多の史料を丁寧に紐解いた研究で、今後に大いに期待

が寄せられる事が評価されての授賞です。

授賞式、ならびに式典終了後の祝賀会には総勢80名以上の出席者があり、各々の受賞を讃えました。

平成30年12月2日(日)開催

東方学院・酬仏恩講合 同講演会

於 神田神社

第19回東方学院酬仏恩講合同講演会は、奈良・法相宗大本山薬師寺のまほろば会館にて行われました。本年は48人の参加がありました。



丸井浩事務局長代読による前田専學学院長の開会挨拶に始まり、庄司史生講師(立正大学仏教学部専任講師)より、「神と仏の国ネパール」と題した帰朝講演が行われました。これは当法人がおこなっている助成事業「アジア諸国海外派遣・調査助成」の報告で、ネパールの仏教や般若経に関する研究成果が発表されました。続く伊東照司講師(前東京外国語大学講師)からは

新 刊 案 内

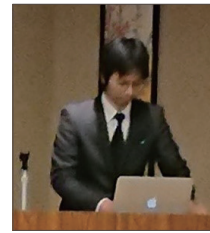
吉村均著 『チベット仏教入門』(ちくま新書)

生と死の教えが世界的に注目されているチベットの仏教。その正統的な教えを解説した初めての入門書。必要最小限の知識を紹介し、教えの本質をやさしく説き明かす。

新書：301頁
出版社：筑摩書房 言語：日本語
ISBN-10：4480071911
ISBN-13：978-4480071910
発売日：平成30年11月6日
定価：本体900円(税別)



「薬師寺本尊台座に見る渡来民—古代日本と南海との友好」というテーマでの講演が行われました。薬師寺松久保秀胤長蔵による閉会の挨拶を以て本年も恙なく終了となりました。



庄司史生講師



伊東照司講師

【今後の行事のご案内】

★平成31年度 東方学院ガイダンス

研究会員を対象とした参加無料のガイダンスでは、当学院の特徴や講師による講義の説明などを行います。講師と直接お話しする事も可能です。

中村元博士が学院長であった頃より行われており、東方学院の入学式ともいえるべきものです。

新規受講の方だけではなく、継続受講の方もぜひご参加ください。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

東京本校・4月8日(月)

18時～

於 ホテル東京ガーデンパレス

関西校・4月5日(金)

18時～

於 ホテル京阪京都グランデ

中部校・4月7日(日)

18時30分～

於 ホテル名古屋ガーデンパレス

★法恩寺仏教文化講演会

高松市の法恩寺と共催している芸術や仏教文化に関する講演会です。申込者は誰でも参加可能です。

平成30年は5月に堀内伸二講師(中村元東方研究所専任研究員・東方学院講師)が「仏教を

歩むとは?—臨済禅の修行を通して—」のテーマで講演を行いました。

平成31年5月24日(金)開催予定

時間・午前9時半～

会場・法恩寺(香川県高松市鹿

角町675-3)

※本年の詳細は決まり次第、ホームページでお知らせ致します。

★神儒仏合同講演会

神田明神、湯島聖堂と共催の講演会で、申込者は誰でも参加ができます。

平成30年度は「長寿を楽しむために」という合同テーマで神道・儒教・仏教それぞれの立場からの講演が行われました。

平成31年7月27日(土)開催予定

時間・午前13時～

会場・神田神社祭務所ホール

定員・150名

※テーマなど詳細は決まり次第、ホームページでお知らせ致します。



新 刊 案 内

田中公明著 『梵文『文殊金剛口伝』研究』

日本では珍しい、ネパール成立の密教文献の研究書。「秘密集会」ジュニャーナパーダ流を特徴づける文殊金剛十九尊曼荼羅の儀軌のIASWR写本、東京大学写本、ケンブリッジ大学写本のローマ字化テキストを対照させたモノグラフ。文献概説、ビブリオグラフィー付き。

単行本：107頁
出版社：渡辺出版 言語：日本語
ISBN-10：4902119293
ISBN-13：978-4902119299
発売日：平成30年11月1日
定価：本体3,000円(税別)



事務局通信

【東方学院専用ホームページのお知らせ】

平成 30 年 1 月 1 日より、スマートフォンにも対応している東方学院専用ホームページ <http://tohogakuin.org> を公開しております。講師・講義の紹介や学院からのお知らせなどをご確認頂けます。ぜひご活用ください。

【編集部より】 東方だよりは、読者の皆様からのご意見・ご要望をいただき、よりよい誌面にしていく所存です。また、ご寄稿もお待ち申し上げております。尚、ご連絡は手紙（宛名面に「東方だより編集部宛」とご記入願います）にて承っております。

当研究所の活動にご賛同下さる皆様へお願い

公益財団法人中村元東方研究所は、創立者中村元の理想を実現するため活動する非営利の文化事業財団であり、その運営はご理解ご協力いただける皆様からのご寄付により成り立っています。当研究所では各種会員を設定して、活動趣旨にご賛同いただける皆さまの積極的なご支援をお願いしております。

(1) 一般寄付

一般寄付は会費と異なり、金額や期限等を設定せずに、随時受け付けさせていただいております。お寄せいただいた寄付金は、当法人が取り組んでいるさまざまな活動に広く活用させていただきます。

(2) 継続ご支援（維持会員・賛助会員）

当法人の活動に賛同し、継続的に支援して下さる会員も随時募集しています。

・維持会費：一口 年 50,000 円

・賛助会費：一口 年 10,000 円

※上記いずれかをお選びいただき、出来れば複数口でご支援賜れば幸いです。

(3) 普通会員：年会費 7,000 円

普通会員にも、維持・賛助両会員と同じく、定期刊行物『東方』の他、催し物、会合等のご案内をお送りいたしますが、年会費に税の優遇措置は適用されません。

【所得税の免税について】

当法人は内閣府の認定を受け、平成 24 年 7 月 2 日をもって、従来の財団法人から「公益財団法人」へと移行いたしました。公益財団法人へ移行したことに伴い、上記 (1)、(2) の一般ご寄付及び維持会・賛助会の会費は、下記の通り税制上の優遇措置が受けられます。

※所得控除・・・所得控除は、所得金額に対して寄付金額の大きい場合に減税効果が大きくなります。「その年の寄付金額 - 2,000 円」が課税される所得金額から控除されます。控除できる寄付金額はその年の総所得金額等の 40% 相当額が限度となっております。

公式ホームページのご案内

東方研究所及び東方学院の公式ホームページでは、さまざまな情報が随時更新されております。是非ご覧下さい。

ホームページ URL : <http://www.toho.or.jp>

中村元東方研究所

検索

- ▶ 当研究所の目的・理念・あゆみ
- ▶ 中村元博士の略歴・著作文献目録
- ▶ 東方学院（開講科目、講師紹介、著書紹介）
- ▶ 専任研究員紹介、書籍案内
- ▶ 公開講座、イベントのお知らせや開催レポートなど

東方学院専用ホームページ URL :

<http://www.toho-gakuin.org>

(スマートフォン対応)

東方学院

検索

- ▶ 東方学院の開講科目や講師の紹介、開講日などをご案内しております。

東方だより 平成 30 年度後期号 (通号第 33 号)

平成 31 年 2 月 18 日発行

【編集 / 発行】 公益財団法人中村元東方研究所 本部事務局 (東京)

編集責任者：釈悟震

〒 101-0021 東京都千代田区外神田 2-17-2 延寿お茶の水ビル 4 階

TEL : 03-3251-4081 FAX : 03-3251-4082